

うちの真向かいの駐車場は通りより大人の背丈ぐらい高くなっており、通りに面したその法面^{のりめん}はコンクリートの壁に覆われている。

先日の朝ペランダのカーテンを開けたら、この壁面に、以前から小さなものはいくつかあったが、壁の三分の一を占めるぐらいの大きな落書きがあるのに気がついた。前の晩カーテンを閉めたときにはなかったから、夜の間に、街灯の明かりのもとで描かれたのはたしかである。24K[〃]という文字が立体的に、陰影までつけて描かれている。24キロの意味なのか、もつと別な意味があるのか、そのへんは不明である。

しばらく前から、くずし字のアルファベットなどを組み合わせたような、意味不明の大きな落書きを、あちらこちらで見かけるようになった。どういう人たちが描いているのかよく判らない。

大分以前、週刊誌か何かで、外国のどこかの街（もしかしたらニューヨークだったかもしれない）の地下鉄のホームの壁にたくさん落書きが描かれているという記事を読んだ覚えがある。そういう外国の風景を日本にも移植したくて描いている若い人たちの姿がふと想像された。

落書きは日本にも昔からある。そのおもなものは〃へのへのもへじ[〃]といった平仮名を組み合わせせて人の顔にしたものや、相合傘の下に男女の名前を並べたものなどで、それが裏路地のしもた屋の板塀などに小さく描かれていた。子供のころの私も近所の遊び仲間たちと、これはさすがによその家の板塀ではないが、地面に蠟石^{ろうせき}で〃へのへのもへじ[〃]などを描いて遊んだものである。

その地面がなくなり板塀もなくなった。さまざまものが変わってゆくなかで、落書きが横文字ふうの意味の判らないものになってゆくのも、あたりまえのことかもしれない。